

# 雑誌「都市美」及び新聞記事にみる 戦前・戦後期における都市の美観意識

有田 昌弘<sup>1</sup>・中井 祐<sup>2</sup>

<sup>1</sup>非会員 修士(工) ㈱日本測地設計

(〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-23-6, E-mail:arita@nss-kk.co.jp)

<sup>2</sup>正会員 博士(工) 東京大学大学院 工学系研究科社会基盤学専攻

(〒113-8656 東京都文京区7-3-1, E-mail:yu@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

本研究では、1930年代から40年代前半までの東京において、都市の美観上問題視されていた事象を整理し、かつ戦後の推移もしくは変容を、1964年の東京五輪までの時期について明らかにすることを目的とする。戦前の専門誌と、戦前から戦後にかけての新聞記事を調査対象とした。本研究の結果、【広告看板】と【建造物】についての関心が高かったこと、一般大衆の衛生への問題意識が高かったこと、戦時体制下では機能偏重の美観が志向されていたこと等を明らかにした。そして、専門誌が幅広い視野を獲得していた一方、新聞が個別具体的な美観に着目する傾向にあったこと、意匠面では対象や方向性が分散し、統一の見解が形成されなかったことを示唆した。

キーワード:美観, 都市美運動, 建築意匠, 公衆衛生

## 1. はじめに

### (1) 背景と目的

明治以来の近代化によって、日本の都市の姿は大きく変化した。その過程において、都市の美観の実現は、時代によってその重みに差はあれども、都市の近代化におけるひとつのテーマであり続けた。

たとえば関東大震災後の帝都復興事業は、東京の都市景観を大きく変える転換点になったが、当時国内では、米国の City Beautiful Movements に影響を受けた「都市美」の実現を目指す活動が高まりを見せはじめていた。中島はこれらを「都市美運動」と称し、都市美協会を中心とする諸団体が、1920年代後半から1960年代半ばまで積極的に活動を行っていた事実を明らかにしている<sup>1)</sup>。

しかし当時の都市美に対する言及は、現代のそれとやや異なる様相を見せる。たとえば近年、日本の都市の清潔さに言及する外国人のコメントがネット等で散見されるように、現代日本の都市の顕著な特徴のひとつは、海外諸都市に比して、路上にゴミひとつ見られない清潔さにあると言えるだろう。しかし戦前の文献や新聞記事を見ると、路上に痰唾を吐く、用をたす、ゴミを捨てる等の非衛生的な行為が日常的であったことが読み取れる。

一方で、電線電柱や広告看板の乱立、建築物の外観の不調和といった、いわば都市の意匠的側面の課題に対する議論も当時頻繁に行われていたが、これらの問題は、

現代に至っても変わらず指摘され続けている。つまり日本において、近代化という外力は、衛生と意匠のふたつの面において都市の外観に乱れを生じさせ、そのうち前者はみごとに解消されたが、後者については100年を経て大きな進展を見せているとはいいがたい。

路上のゴミひとつに神経質になりながら、乱立する電線電柱や広告看板をさほど気にしないわれわれ日本人にとって、都市の美観とはどういう概念、あるいは価値なのだろうか。この問題を考える端緒として、本稿では、近代日本において最初に美観に関する意識の高まりが見られた1930年代初めから戦前期において、具体的にどのような事象が、都市における美観上問題視されていたのかを整理する。そのうえで、上記の問題意識が、戦後にかけてどのように推移または変容したのかを考察する。

### (2) 分析対象

以下の資料を調査対象として用いた。この中で「東京」「東京を含む都市」における「都市の美観」を扱う記事を対象とした。

・雑誌「都市美」（論説型式の記事に限定して抽出）

・朝日・読売の両新聞

(1930年1月1日～1964年10月9日<sup>2)</sup>までの期間)

### (3) 分析手法

本研究の分析は、以下の手順で行った。

(一)雑誌「都市美」の論説記事を読み込み、当時の専門

家や知識人の抱いていた都市美への問題意識を抽出・分析した。

(二)新聞記事を用いて、特定の語句を含みかつ都市の美観に言及がある記事を抽出し整理した。

(三)都市の美観について否定的ニュアンスを含む箇所を抽出し、資料として整理した。それらを基に、一般的な世論も含めた当時の問題意識の動向を分析した。

以上の結果を踏まえ、雑誌「都市美」と新聞記事を相互に参照し、当時の人々が都市の美観上どのようなことを問題視していたのかについて、傾向や特徴を明らかにした。文献資料は以下 a～f のカテゴリー毎に収集・分析を行った。

a : 看板・広告・ネオン

b : 電線・電柱

c : 建造物 (建築, 土木構造物, 街路照明, 路上設置物, 工作物等)

d : 痰唾・汚穢・ゴミ

e : 公害(大気汚染, 水質汚濁, 臭気, 騒音等)

f : その他

## 2. 意匠的美しさ・衛生的美しさに関する変遷<sup>①</sup>

### (1)使用する語句について

本研究では、「都市の美観」を「意匠的美しさ」、  
「衛生的美しさ」の二種類に分け、文献資料等の分析・考察を行う。

ここで言う「意匠的美しさ」とは、都市空間における建築物・工作物等の外観の美や、計画的に整えられた都市の景観の美を指している。一方「衛生的美しさ」は、衛生環境整備や清掃による空間の清潔さを指し、英語で言う“clean”の意味で用いている。

### (2)意匠的美しさについて

1923年の関東大震災を機に建築家や芸術家達は、1919年に誕生した都市計画法への「美観」に関する事項の記載に向けて活気づいた。1925年に椽内吉胤らにより都市美研究会が設立され、その運動理念を、当時米英で再評価されていた都市づくりの理念である「シヴィック・アート」=「都市芸術」とした。翌年には、都市美協会へと改組し、各種啓蒙活動等を積極的に行い始める。都市美協会が世間に名が知れるようになるのは、1929年末から1930年初頭の、建設中の新警視庁庁舎に対し、官庁街の遠望景観や宮城に対する畏怖等の理由から異議が唱えられた事件であった。最終的に計画が見直されたことで、新聞はこれを都市美協会の功績として報道した。世間の認知度を急速に高めた都市美協会は、当時の東京市とも結びつきを強めてゆく。1930年代には、雑誌「都市美」の刊行や、東京市と協働で行う啓蒙活動等を積極的に展開し始める。1930年代半ばには、都市美に関する団体が

相次いで設立され、運動は隆盛を誇ると同時に多元化していった。1933年には初的美観地区として皇居周辺が指定され、1936年7月、1940年の東京での万博と五輪の開催が決定すると、新聞では都市美に関する記事が急増する。市や都市美協会は大掃除や展覧会の開催などにより、都市醜の排除や市民の公德心向上を図った。しかし2年後には万博、五輪ともに、日中戦争の影響で返上もしくは開催延期が決定し、都市美運動も沈静化してしまう。この頃には防空や健康への関心が高まり、それが記事や行事の内容にも現れ始める。1943年以降、都市美協会は  
大政翼賛体制に取り込まれ戦前の活動を終える。

戦後は1950年代から幾つかの団体による都市美運動が行われていたが、そのほとんどが清掃活動や環境整備運動など、費用や歳月を要しないものであった。さらに行政からの復興途上に権利を制限することへの慎重な意見や、業界団体の反発等によって十分な規制も設けられず、運動は行き詰まりを見せ始める。しかし東京オリンピック開催の決定により、一時的に活気を取り戻し始める。主な動機は外客の目を意識した美化であり、戦前の五輪に向けた姿勢を彷彿とさせるものであったが、都市醜排除等、目前の課題を解決するという点に重点を置いていた点で、戦前の審美的観念の導入等の取り組みからは次第に離れてゆくこととなる。

### (3)衛生的美しさについて

関東大震災は、当時の人々に劣悪な衛生環境を強いた一方、復興事業による水道施設の耐震構造の進歩や下水施設の一層の普及ももたらした<sup>4)</sup>。しかし、震災後の急速な郊外の宅地化により、上下水道の利用人口は伸び悩んだ。1930年の汚物掃除法改正で、焼却や尿尿の処理が原則義務付けとなり、ゴミ処理の機械化、効率化が可能な体制が徐々に生まれつつあった。1932年には、より広域的な都市整備の必要性から35区により成る大東京が誕生した。これにより、昭和恐慌対策も兼ねた衛生環境の整備が加速したが、時代が戦争に向かうにつれ、予算はほとんどが軍事関係費として使用されるようになり、また軍需産業による人口集中と水使用量増加による上下水道の荒廃化も進み、維持管理で手一杯という状況であった<sup>5) 6)</sup>。

終戦から程なく大量生産・大量消費の時代に突入した。ごみ収集や尿尿処理の機械化が進んだものの、処分量の急増にはとても追いつかなかった。衛生意識の高まりや  
税金の増加に伴い、上水道は急速な普及をみせた<sup>7)</sup>が、下水道はGHQがあまり関心を払わなかったこともあり、戦後しばらくは整備が停滞した。次第に化学肥料の普及も始まり、尿尿の不法投棄や排水の未処理などによる環境汚染が相次いだ。1958年の下水道法公布により、下水道も普及への段階を踏み始める<sup>8)</sup>。1960年代前半に

は、五輪に向けてごみの定時収集やポリバケツ容器の設置など、現在のシステムの基礎が形作られた。路面や河川等、街中での清掃もスタートした。しかし同時に進む急激な都市への人口・機能集中により、東京では五輪開催年の1964年においても、ごみや下水の危機的な処理能力の不足が続いていた。

### 3. 雑誌「都市美」について

#### ・分析手法

本調査では、雑誌内の記事数に占める割合が比較的大きく、時代的もしくは思想的な背景を読み取りやすいと思われる論説形式の記事に絞って分析を行った。「都市の美観」への具体的な言及が確認できた論説は計62編が抽出でき、「執筆者(所属含む)」「掲載号・ページ」「論じられている対象の種類」について整理した後、以下の観点で分析を行った。

ー対象の美醜とその理由

ー美醜を論じている対象の詳細

現代(2010年代)の価値観と大きな隔絶を感じる記述については、積極的に考察の対象とした。

引用した雑誌の文章については論文の最後に一覧を付記した。また、論説内容の推移を(表-1)にまとめた。

#### (1)看板・広告・ネオン

雑誌の刊行以降、【乱雑・不調和】に対する問題意識が一貫して述べられていた。1932年に「今日の都市にみなぎる色調の狂態を漸次抑制して調和の色調に改め」<sup>9)</sup>とあり、休刊直前の1941年にも乱雑さを悲観する記述が見られた。1940年代には、広告を全て国で管理すること、看板広告の鉄材としての利用について論じるような内容が増加している。一部、広告看板を擁護するような記述も見られた。建築との一体性を良しとするものや、「(ネオンサイン)などはもう少しよくデザイナーに相談したら、綺麗になるだろうと思います」<sup>10)</sup>など、改善の余地を述べるものがあつた。

#### (2)電線・電柱

【地中化・共同化の促進】と【交通の妨げ】に関する問題意識が通底していたが、意匠的美観のために行っていた30年代中盤までと違い、それ以降の目的は空襲の二次災害を防ぐことであつた。前者の例は、「今日、都市の中心に架空線が頑張っているという所は、私の見た都市ではコロンボとシンガポールぐらいで、その他の都市にこんな邪魔者はない。都市の美観と街路の効用はすべてこの架空線に依って阻害されているのであると思う」<sup>11)</sup>であり、後者の例は、「若しも都市が空襲を受けた場合にはこの地上工作物が非常な障害となる、出来るべくは架空線を全部地下に埋設したいというような議論が強く主張される様になった」<sup>12)</sup>などがある。

#### (3)建造物(建築、土木構造物、街路照明、路上設置物、工作物等)

1930年代中頃までは、「都市に於いて靜的に最も人心を刺戟する普遍的なるものは街路と建築とであるが之に對し美觀上より統制を加ふることは都市美増進の根本義である」<sup>13)</sup>など、意匠的な都市美の主因であるという記述が多く見られた。しかし戦争が近づき、「最も緊要なることは都市の持つ内容の整備であり、美觀はその結果でなければならぬ」<sup>14)</sup>など、美觀から機能へと価値観の転換が見られた。また、建築意匠に関して欧米に追従する記述は1937年以降見られなかった。西洋趣味一辺倒ではなく、東洋趣味が設計者の裁量で取り入れられるとよいという記述も見られ、当時の意匠に関する言説が、欧米に追従するだけでなく、自国の様式をどのように確立するかを模索していた状況が読み取れた。

#### (4)痰唾・汚穢・ゴミ

大衆の公德心の無さと併せて語られることが非常に多く、例として「(喀痰を平気でどこへでも吐くという)悪い因習を矯正し、市民生活の公德心を喚起し、以つて都市の清潔を圖り、美化を企てようとした」<sup>15)</sup>などがあつた。五輪決定後には、外国人と比較したモラルの低さへの嘆きが複数見られ、例として「(海外で道路、公園、建築等の整頓、美觀、清潔を見て)我が都市醜の多きを痛感して、歐米人に恥かしく思ひ…」<sup>16)</sup>等がある。しかし1940年前後からは、ほぼ衛生的、機能的な観点から語られるようになった。

#### (5)公害(大気汚染、水質汚濁、臭気、騒音等)

数は水質が約6割、次いで大気汚染、騒音であつた。衛生面だけでなく意匠的美觀の一部としても論じようとする記述が1936、37年に多く見られた。例を挙げると、「(ゴミや汚穢が公共の場に放置されていることや、河川に汚物が流され臭気が漂うこと等が)衛生によく無いことはいふ迄も無いが、又都市美を害する點に於ても、眞に恥づ可き事では無いか」<sup>17)</sup>などである。

#### (6)その他

意匠的美觀に関する記述が約3分の2を占め、個別の対象では、緑が約4割、次いで交通機関(市電・バス・自転車等)が多かつた。五輪の前後には、人々の身なりや洗たく物にまで言及する記述が目立ったほか、浮浪者のいる風景が文明国ではありえないとする記述などがあつた。洗たく物については、「衛生上必要なことではあるが、大通りに面した窓に白いシーツや赤い蒲團が麗々しく並んで干されて居ることは決して、文明國の都市風景とは云い難い」<sup>18)</sup>など、干されている物ではなく、干すこと事自体を恥とするような論調が目立った。街路樹の扱いは全体として好意的だったが、そうでないものも2箇所見つかった。「整然と統一されたる帝都の街路樹

の下に、自分で勝手に秋の七草なんかを植ゑられたりしては非常に汚くなる。あれは絶対に厳禁されたい<sup>19)</sup>や、ロンドンにある街路樹が、果樹にも材料にも使えず全く役に立たないとする内容の記述であった。また、市電を嫌う記述は多く、以下の様な、極端にバスを美化した文章も見受けられた。「軽快な、静かな、便利な、気持ちのよいバスがスクスクと舗装の車道を行きかひに走ってある光景は、それこそ都市美に一致する」<sup>20)</sup>。

カテゴリ/西暦	1931~1934		1935~1938		1939~1942	
	論説数	主なテーマ	論説数	主なテーマ	論説数	主なテーマ
a: 広告・看板・ネオン	5	乱雑さ、不調和、規制の少なさ、あり方	14	乱雑さ、不調和、規制の少なさ、あり方、海外との比較	7	資源としての利用、国威や都市機能への影響
b: 電線・電柱	1	電柱の醜さ、交通への悪影響	10	電柱広告の醜さ、共同溝設置の促進	2	空襲対策としての地下化
c: 建造物・照明	5	個人主義への警鐘、欧米との比較、日本的近代化の標本	21	個人主義への警鐘、欧米との比較、木造家屋の撤去	8	防空・防火・日常生活のための建築・都市
d: 痰唾・汚穢・ゴミ	2	清掃活動の推奨、観光への悪影響	11	市民の公徳心の欠如、欧米に対する劣等感	2	市民の健康の重要性
e: 公害	1	騒音による感覚への影響	11	河川の汚染について、市民の習慣による汚染、都市の品位の失墜	5	市民の健康・生活のための対策
f: その他	5	植樹の重要性、窓ガラスや交通車両の清掃促進	10	人々の見た目(浮浪者、婦人、警官)、路面電車の禁止	6	市民の健康のための植樹、都市美としての防空対策

表-1 「都市美」論説内容の推移

#### 4. 新聞記事について

##### ・抽出、分析方法

本章での調査は、以下の手順で行った。

- (一)各データベースにて「景観」「美観」「都市美」の3つの語句によるOR検索を行い、得られた記事から単なる広告記事と、『都市の美観』に言及していない記事を除外した。
- (二)(一)で抽出された記事を、以下の項目について整理し、一覧表を作成した。  
「新聞社」「日付」「見出し」「対象」「対象の種類」「対象の評価(肯定的、否定的、重要視)」「記事形態(一般記事、論説、専門家、一般大衆)」
- (三)記事整理後、対象について否定的記述が含まれる記事を再度抽出し、最終的な対象として、朝日新聞から189件、読売新聞から276件を抽出した。(表-2)にて記事数の推移表を示した。なお、記事数はカテゴリー毎に集計しているため、上記の合計数とは一致しない。また、まとまりをもって見られた記事内容についても、(表-3)にて示した。

##### (1)看板・広告・ネオン

両紙ともにa~fの全カテゴリー中で記事数が最多であった。内容は、【描画・色彩デザイン】【記載内容】【形態】【存在そのもの(明確な理由なし)】【設置場所】【その他】の6つに大別することができた。

〈戦前〉

【形態】については、「醜悪」という具体的でない表現が計23記事中10記事に用いられていた。電柱広告にはこの表現が多く用いられ、雑誌も含め特に拒否反応の大きな対象の一つであった。具体的な問題意識が多かったのは大きさ、次いで突飛な形態をした広告物であった。

【存在そのもの】は高頻度で一定数の言説が存在した。明確な理由が記載されていない記事が大多数であり、世間の風潮としての「看板・広告・ネオン批判」があったのではないと思われる。

〈雑誌「都市美」との比較〉

雑誌、新聞ともに広告看板は、問題意識の中心的な対象であったと考えられる。内容を見ると、新聞では、個別具体的な事例が多く、また俯瞰的な視点を持つ記述が非常に少なかった。

〈戦後〉

1948年から7記事を数え、問題意識は早くから強かったようであった。【記載内容】は、戦前は具体的な記述が多く見られたのに対し、「風致や風紀を無視した各種の広告」<sup>21)</sup>「誇大広告」<sup>22)</sup>など、概括的な表現が増加していた。【形態】については専門家による記述が一定数見られた。内容を見ると、前述の【記載内容】とは対照的に「目を塞ぎたくなるばかり非美術的な汚い看板の横行乱立」<sup>23)</sup>「数寄屋橋際で路面にまでせり出した広告塔」<sup>24)</sup>など、具体的な記述が増加した。ただ戦前とは異なり、対象が分散している様子が伺えた。

##### (2)電線・電柱

内容は、【数】【架空線】【形態】【場所】【存在そのもの(明確な理由なし)】の5つに大別できた。

〈戦前〉

【形態】は、「醜悪」や「醜い」という抽象表現が戦前の全4記事に見られた。当時は「眞黒なコールタールに塗りつぶされた醜い電柱」<sup>25)</sup>と、現代と外観が異なっていたようであり、嫌悪感も強かったと思われる。

〈雑誌「都市美」との比較〉

【架空線】が多いことは共通している。内容の違いとしては、雑誌で3箇所ある交通への影響に関する懸念が、新聞では全く見られないことである。

〈戦後〉

1946年に記述があるが、本格的な再登場は1958年頃からであった。戦災復興のための速やかな電力供給が必要だった時期と重なるため、優先順位が大きく低下したことが一因と考えられる。

##### (3)建造物(建築、土木構造物、街路照明、路上設置物、工作物等)

両紙とも数では全カテゴリー中2番目に多い。内容は、建築と土木それぞれについて【色彩】【形態】【事例】【その他】に大別でき、建築はさらに【仮設物(バラック等)】を追加した。その他は【照明】【設置物(ごみ箱、店台等)】【工作物・設備(配管、アンテナ等)】で、計12分類となった。

〈戦前〉

建築に関する記述は、1930、36~38年に集中している

が、36～38年にかけて規制対象としてのバラックや夜店などが加わり対象が多様化した。土木については鉄道施設関連が大半を占め、1937年以降は記述が無かった。  
 〈雑誌「都市美」との比較〉

内容における大きな違いは、機能面にも視野を広げた記述が多く見られる雑誌に対し、新聞は概ね表層的・意匠的な観点からの記述が多いように思われたことである。  
 〈戦後〉

建築では形態に関し、一貫して「無計画」や「ふぞろい」が問題視されていた。土木では、戦前の中心的話題であった鉄道に代り、自動車の道路整備が大部分を占めるようになった。

**(4) 痰唾・汚穢・ゴミ**

内容は、【紙くず・塵芥】【タバコの吸殻】【痰唾】【汚穢物】の4つに大別できた。一般読者の投稿割合が他のカテゴリーに比べ大幅に高いことが特徴であった。  
 〈戦前〉

戦前から読者からの投稿の割合は非常に高かった。その全6記事中、【紙くず・塵芥】に属するものが5記事あり、一般読者の路上の紙くずやごみに対する問題意識の大きさを表わしていると思われる。一方【汚穢物】や【痰唾】に関しては、行政による痰唾吐きや立小便に対する規制・指導に関する記述として述べられていた。

〈雑誌「都市美」との比較〉

雑誌では【痰唾】に関する言説が5記事と多く、【汚穢物】も新聞の1記事に対し、6記事に上った。また、雑誌で論じられることの多かった公德心は、新聞ではほとんど言及が見られなかった。

〈戦後〉

1947年という早い時期から記述が確認できた。戦後の特徴としては【紙くず・塵芥】が占める割合が8割近くに増加したことが挙げられる。一方で【痰唾】【汚穢物】については1955年以降は記述が見られなくなった。

**(5) 公害(大気汚染、水質汚濁、臭気、騒音等)**

両紙の合計記事数は全カテゴリー中最も少ない。内容は【水質汚濁】【大気汚染】【騒音】【臭気】の4つに大別できた。

〈戦前〉

【大気汚染】が4記事と最も多かった。【水質汚濁】は1937年の河川改修に関する1記事のみであり、原因に関しては記載がなかった。

〈雑誌「都市美」との比較〉

雑誌のほうが箇所数は多いが、他のカテゴリーと比べた時の優先度は新聞と同様低かった。【騒音】に関して、

街頭の「騒音広告」に関する記述が共通して見られた。  
 〈戦後〉

【水質汚濁】は、五輪開催が決まった1959年以降、隅田川と羽田空港周辺に関する記述のみとなっている。汚染が深刻化したことや、外国人の目につきやすい場所であることが理由だと思われる。【騒音】は戦前の2記事から8記事へと急増し、内容にも多様化が見られた。

**(6) その他**

内容は、【洗たく物】【色彩】【市電・バス】【植栽】【人々】【その他】の6つに大別できた。戦後は論説と専門家による記述が大きく増加した。

〈戦前〉

【洗たく物】についての1939年の記述は、雑誌同様干すことを恥じる内容であった。【市電・バス】に関して、市電は「騒音」「交通の妨げ」、バスは「車体が剥げて不体裁」もしくは「清掃不十分」が否定的である理由となっていた。【人々】については、多くが浮浪者に関する記述であったが、1936年の投稿記事である「警官の服装」は、警官の服装をもっと欧米式の豪華なものにとというユニークな内容であった。

〈雑誌「都市美」との比較〉

雑誌のみ【植栽】に関して否定的な意見が述べられていた。また【市電・バス】については雑誌、新聞共に同じような観点で否定がされていた。【人々】については、浮浪者に関連する記述が1936、37年に新聞・雑誌共にまとまって見られた。

〈戦後〉

【その他】が急増し、対象も年代により大きく異なっていた。また【植栽】に関する論説や投稿記事が登場し始め、緑地に関する問題意識が浸透しつつあることが窺える。【洗たく物】【市電・バス】は戦後も複数の否定的記述が見られ、両者は依然美観を害する対象で在り続けたようであった。

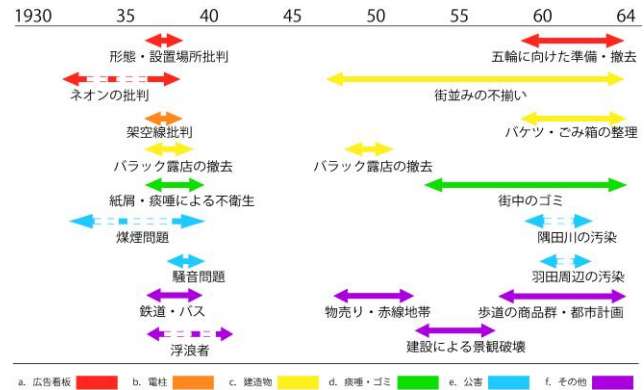


表-3 新聞においてまとまりのあった記事内容の推移

カテゴリー\西暦	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	計
a: 広告・看板・ネオン	30	1	23	11	4		9	11	11	3	4		1	1					6	2	3	1	3	1	18	2		6	3	8	8	3	9	5	9	196
b: 電線・電柱	2	2	2	1		7	6	3		2						1				2	3	3	3	6	9		1	1	7	15	1	3	7	103		
c: 建造物・照明	8		9	2	1		6	7	2	2										2	3	3	3	3	6	9									3	33
d: 痰唾・汚穢・ゴミ						2	4	5	4										1	1			3	3			1	1	2		3	3	3	3	33	
e: 公害		1				1		2	2	1									2	1	2				4	2		2	6	2	1	2	1	29		
f: その他	2					4	2	3	2	2	3								1	2	3	3	4	5		1		4	8	3	1	9	62			

表-2 美観に関する否定的記述のある新聞記事数の推移

## 5. 考察

戦前は、雑誌、新聞ともに看板広告や建造物に関する記事数が非常に多く、関心の高さが読み取れた。五輪開催決定に伴い、人々の見た目や公德心にまで改善の必要性を訴える記事が増加した他、痰唾やゴミ等の衛生面への言及も読者の投稿記事を中心に見られるようになった。しかし、1939年頃から戦争の影響による記事数の減少や機能重視の論調が目立ち始め、美観を議論する場合は急速に縮小してしまった。戦後に入っても看板広告や建造物への関心は高いままであったが、相対的にゴミや公害等の話題の割合が増加した他、意匠面、衛生面共に対象の多様化が見られた。しかし看板や建築物の乱雑さや無計画さに関する記述内容は、戦前からあまり変化が見られなかった。

東京五輪招致が決まった1936年と1959年およびその後数年間は、全体に美観への言及や批判的言説が増加しているが、それが包括的な都市美の実現を主張するムーブメントに至った形跡は見られない。また、対象期間を通し、意匠、衛生ともに、専門家と大衆の間に大きな問題意識の相違は見られず、新聞記事を中心に問題のとらえ方も総じて個別的であった。

## 6. おわりに

### (1) 本研究の成果

- 1931年から1942年まで発行された雑誌「都市美」における専門家の論説内容について調査を行い、彼らが抱いていた都市の美観に関する問題意識の内容と、その推移や変化に関する知見を得た。
- 1930年から1964年の東京オリンピック開催までの期間について、新聞紙上の美観に関する否定的記述を抽出し、対象種別のカテゴリ毎に整理し、述べられている対象の推移や変化、戦前の雑誌における記述との相違・共通点に関する知見を得た。
- 以上の知見をもとに、1930年から1964年における美観意識の推移や変化を、主に専門家と一般大衆の傾向に着目して考察を行った。

### (2) 今後の課題

写真・映像資料の収集やヒアリング等により、当時の都市景観のより客観的な状況を把握することが必要である。

## 参考文献

- 1) 中島直人：「都市美運動 シヴィックアートの都市計画史」東京大学出版会、2009
- 2) 公益財団法人 日本オリンピック委員会 HP 東京オリンピック 1964 [http://www.joc.or.jp/past\\_games/tokyo1964/](http://www.joc.or.jp/past_games/tokyo1964/)
- 3) 第2章は以下の文献資料を参考に記述した。

1. 前掲注1)
2. 東京大学社会基盤教室：「東京のインフラストラクチャー 巨大都市を支える(第2版)」技報堂出版、2004、第3章
3. 財団法人 都市計画協会「近代都市計画制度90年記念論集～日本の都市計画を振り返る～」、2011
4. 吉見俊哉「都市のドラマトゥルギー 東京・盛り場の社会史」河出書房、2008、II章・III章
5. 東京都清掃局「東京都清掃事業百年史」、東京都、2000
- 4) 日本下水道協会下水道史編さん委員会「日本下水道史 総集編」社団法人 日本下水道協会、1989、p.127
- 5) 日本水道協会「日本水道史 各論編I(関東 東北 北海道)」1967、p.15
- 6) 前掲注4)、p.133
- 7) 前掲注5)、p.17
- 8) 前掲注4)、p.15
- 9) 椽内吉胤：都市の色彩問題、『都市美』第3号、p.11、1932
- 10) 關重廣：街燈の意匠と其の合理化、『都市美』第21号、p.39、1937
- 11) 吉山眞棹：歐米都市美雑観、『都市美』第19号、p.14、1937
- 12) 花井又太郎：三、電柱整理に関する件、『都市美』第31号、p.32、1940
- 13) 近新三郎：都市美雑感、『都市美』第4号、p.1、1933
- 14) 新名種夫：都市の實質的内容と都市美、『都市美』第23号、p.32、1938
- 15) 白石錦太郎：街を綺麗に氣持よく、『都市美』第26号、p.12、1938
- 16) 高島平三郎：都市醜に就いて、『都市美』第16号、p.2、1936
- 17) 前掲注16)
- 18) 井下清：都市の品位、『都市美』第19号、p.2、1936
- 19) 佐藤功一：六 講演 都市美の種々相、『都市美』第21号、p.19、1937
- 20) 太田謙吉：都市の有機美、『都市美』第36号、p.7、1941
- 21) 読売新聞 1948年8月6日朝刊「緑地帯等では禁止 醜い広告を一掃」
- 22) 読売新聞 1961年3月9日朝刊「きたない広告追放」
- 23) 読売新聞 1948年6月18日朝刊「社説 都市の醜悪化に反抗せよ」
- 24) 朝日新聞 1954年7月12日朝刊「都市醜 見てある記美をぶち壊す無神経」
- 25) 朝日新聞 1933年7月2日朝刊「遂に機會到来？銀座の電柱取拂ひ」